



～高齢者が安心して暮らせるまちへ～

「少子化」と「高齢化」

この2つが同時に進行することで、日本はこれまで経験したことのない
超高齢社会を迎えようとしています

みんなが安心して高齢期を過ごすためにはどうしたらいいのでしょうか
今回は、地域の高齢者グループや地域で高齢者を見守る人取材し、
私たちがこれから何ができるかを考えてみました

「少子高齢化」。近年、この言葉をよく耳にします。

医療技術の進歩などにより、日本は世界でも有数の長寿大国となりました。平均寿命が延びることはうれしいことですが、その一方で、高齢者に係る介護費用等は増加し、それを支える勤労世代(20歳～64歳)の人口は減少し続けています。これまでと同様、質の高い介護サービスを持続させるには、高齢者も若者も、目の前の課題から目をそらさず、しっかりと向き合っていく必要があります。

1・4人で1人を支える

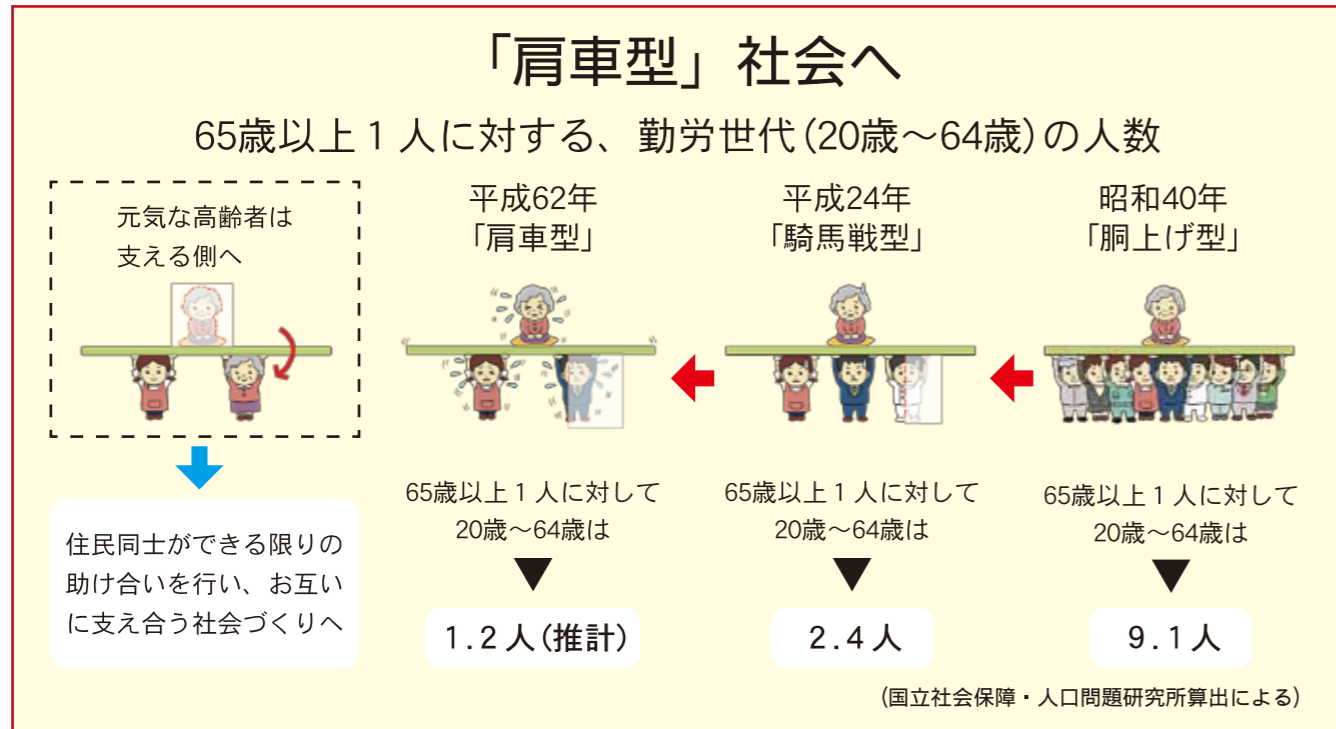
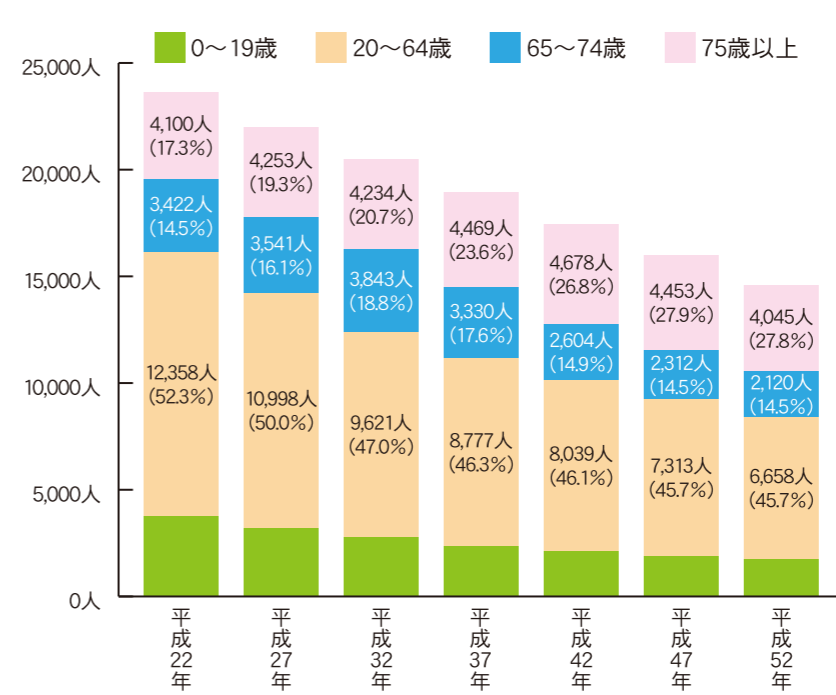
国立社会保障・人口問題研究所が算出した将来推計人口によると、本市は平成22年に全人口236,388人中、65歳以上の高齢者人口は75,222人であり、高齢化率は31・8%であったものが、今後は若い世代の人口減少が見込まれることから、高齢化率は年々上昇し、平成52年には42・3%に上昇すると見込まれています。

また、高齢者を支える勤労世代の側から見ると、今から50年前の昭和40年当時、日本

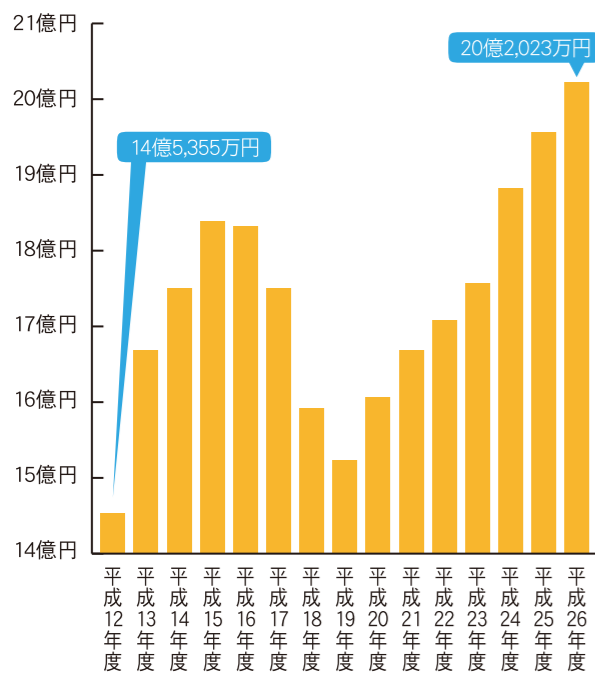
は勤労世代9・1人で高齢者(65歳以上)1人を支える「胴上げ型」と呼ばれる社会でした。それから47年経過した平成24年には、勤労世代2・4人で高齢者1人を支える「騎馬戦型」社会となりました。さらに、今から35年後の平成62年には、勤労世代1・2人で高齢者1人を支える「肩車型」社会がやってくるといわれています。

しかし、地方においては、都会に比べて高齢化が進んでいるため、既に本市では、勤労世代1・4人で高齢者1人を支える「肩車型」社会となっています。肩車型社会は、「高齢者II支えられる側」、「勤労世代II支える側」といったこれまでと同じ意識のままでは、不安定な社会構造となり、勤労世代に重い負担をかけてしまうこととなります。

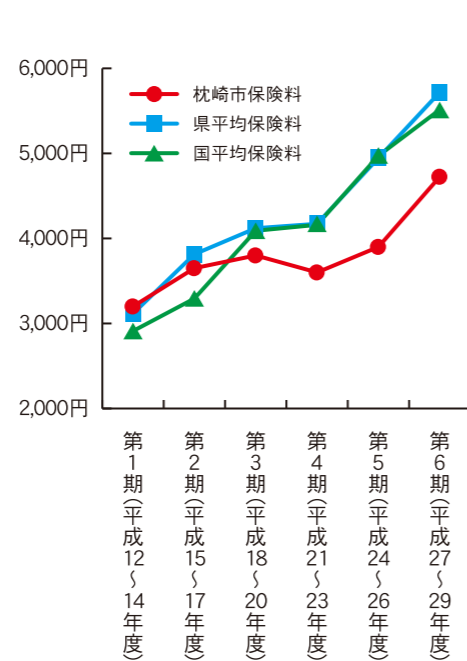
● 枕崎市の将来推計人口 (国立社会保障・人口問題研究所算出による)



● 枕崎市の介護保険給付費の実績



● 第1号被保険者(65歳以上)の介護保険料の推移



増え続ける介護保険料

介護保険制度は、平成12年度に創設され、高齢となり要介護状態となっても、その人の尊厳を保ちながら、能力に

応じた日常生活を営むことができるように、必要なサービスを提供する制度です。介護保険制度は、公費と介護保険料の負担で支えられていて、介護保険料は3年に1

回改定されます。介護保険給付費の財源は、公費で負担する50%を除く22%を第1号被保険者(65歳以上)が、28%を第2号被保険者(40歳～64歳)が負担する仕組みとなっています。本市の介護保険給付費は、介護保険制度が始まった平成12年度は約14・5億円であったものが、平成19年度以降は年々増加を続け、平成26年度には約20・2億円となりました。14年間で約39%増加しました。また、本市の介護保険料は、国や県の平均と比較すると、適切なサービスの提供に努めてきたこともあり、大きく下回っています。しかし、年度ごとの推移では、制度が開始となった第1期(平成12年度～平成14年度)は3,200円であった保険料が、第6期(平成27年度～平成29年度)には4,725円と約48%上昇しています。

高齢化率の上昇に伴い、介護サービスを受ける要介護認定者や認知症高齢者が増加すると、介護保険給付費が増加し、さらに介護保険料も上昇することになります。介護保険料の上昇を抑えるためには、「元気な高齢者」が増えることが大きなポイントになります。